

広西チワン族自治区の省都「南寧」

2010.10.22

香港 花木

10月20日から行われた「中国－アセアン博覧会」参観のため広西チワン族自治区の省都「南寧」を訪れた。同市は西部大開発の拠点都市の1つでもあるところ、活気を見せる南寧の様子を写真も含めてお伝えしたい。

1. 省都「南寧市」

広西チワン族自治区は「中国最大の少数民族」チワン族が人口の30%を占めている。日本では中でも「桂林」が特に有名であるが、地理的には「広西」というの名のとおり広東省の西側に位置しており、その面積は約24万平方^{キロ}、人口は約5千万人とちょうど日本の半分に当たる大きさである。今回この地域を初めて訪れて感じたのだが、山が多く緑が濃い地形は何やら日本の農村を思い出させるところがある。省都「南寧」こそ近代的なマンションやオフィスビルに埋め尽くされているものの、農村部に行けば家の造りも木造が多く、多雨な気候に対応してか日本の古民家に近い屋根構造で、農作物も米を中心に「耕して天に至る」棚田も健在のようである。レストランで会食の際に前菜に「ラッキョウ」が出てきたのには驚かされたが、食文化も全体的に日本との共通点があるように感じた。ちなみにチワン族は風呂好きで知られ、農村部では「露天風呂」の習慣もあるようだ。

省都「南寧」は人口300万人の発展しつつある大都市であり、現在、町の東西を結ぶ地下鉄を建設中のほか、これと十字に交わる路線も計画中だ。街は中国の大都市がどこもそうであるように大規模な道路・公園のインフラが整備され主として西方に向けて拡大しており、道路沿いには大規模な不動産開発が進行中である。タクシー運転手によれば都市の住宅価格は平米当たり8千元、高級物件で1万2千元が相場とのことであり、北京や上海の庶民向け住宅（2万元／平米）より全体にかなり割安である。街の中心は「民族広場」付近で、外資系大規模スーパーや百貨店、ホテルが立ち並び、ファストフードやブランドショップの前を若者が闊歩している様子は他の省都と遜色がない。

南寧を他の中国の大都市と差別化しているのは、ここがベトナムはじめ東南アジア各国への玄関口であるということだろう。市内のバスターミナルからはハノイ行きのバスが毎日出ており、片側三車線の高速道路を走って3時間ほどで国境に達しベトナムに入ることができるほか、南下して「北海」市に出れば船で南シナ海はすぐ目と鼻の先である。南寧市は本年から発効した「中国－アセアン自由貿易協定(FTA)」のまさに玄関口であるほか、中国が推し進める「西部大開発」の対象地域である広西チワン族自治区の省都でもあるため、鉄道や高速道路はじめ国家予算によるインフラ整備が強力に推し進められているのだ。



↑ 近代的な南寧新市街地



↑ 路上はバイクが目立つ

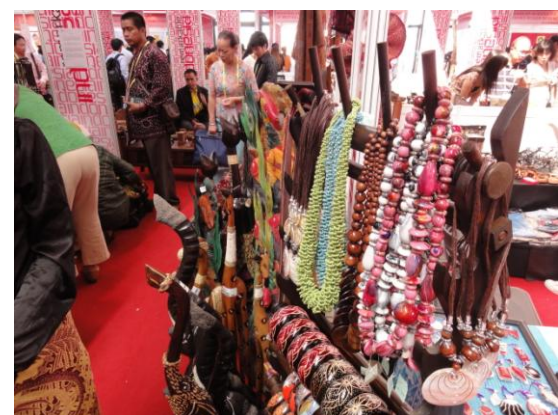
2. 中国ーアセアン博

「中国ーアセアン博」は 2004 年以来毎年秋に開催され、今年が 7 回目の開催である。会期は 20 日からであるが、前日の 19 日には政治局常務委員の賈慶林が開会式典に駆け付け、挨拶を行ったと報じられた。

今回の中国ーアセアン博は、1 月に中国ーアセアン自由貿易協定（FTA）が締結された後最初の開催として特に力が入っている様子で、参加国と中国との間の資源、工業、旅行業等に関する 76 の契約（総額 33 億ドル）のプロジェクトの調印式典が開催されたほか、展示にはアセアン各国及び中国国内企業が多数参加し、主として即売を行っている食品や装飾品、衣料品コーナーを中心に歩くのも困難なほどの盛況であった。中国とアセアン諸国との間では南シナ海問題をはじめ政治的には多くの問題があるものの、経済面では相互依存関係が進展し、密接な関係を構築しつつあることを見せつけられた思いがした。ここでは撮影した写真を何枚か紹介し、その雰囲気を共有したい。



↑ 外国人も多く見かける



↑ さながらデパートの物産展のよう



↑ タイ食品は人気が高い



↑ 中国は環境企業が目立つ

3. 話題 ～ 電気バスの導入

アセアン博開催にあわせ、その2日前（18日）から南寧市でも電気自動車（市バス）が走り始めていた。早々、アセアン博会場の向かいにある「竹溪」バス停を訪れると、高速道路の下を活用した充電スタンドが設けられ、ピカピカの電気自動車バスが充電されていた。

《十城千輛政策》

中国では、2008年の北京オリンピックで多くの電気自動車を利用されたが、その後2009年から電気自動車の利用拡大を継続すべく「十城千輛政策」が採られている。これは、全国10の都市において各都市1,000台づつ公共用の電気自動車（公用車、バス、タクシー等）を導入するというものである。

「十城十輛」の対象都市は、初年度（2009年）が北京、上海、深圳、重慶、長春、杭州、済南、武漢、大連、合肥、長沙、昆明、南昌の13都市、二年度目の今年は天津、蘇州、海口、広州、アモイ、唐山、鄭州の7都市が選定された。（更に秋には瀋陽、成都、南通、襄樊、フフホトの5都市が追加された模様である。）

「十城十輛」の対象都市では、電気自動車の導入に当たり国の補助（市バスの場合、1台当たり最高60万元（約800万円））が利用できるが、一方で対象となる車種（いずれも国産）があらかじめ公示されており、その中から選定しなければならないという制約がある。中国では「地元優先調達」の意識が強く、各地方政府とも市バス等は自分の町に近い工場で製造されたバスを導入したがる傾向があるため、公示対象車種を近隣で製造していない都市は「十城十輛」に手を上げにくいとされる。一方で、電気自動車の技術向上という面でも各都市毎に少ない台数の電気自動車を地元メーカーに発注することから、技術面での競争が十分機能せず、電気自動車関連技術向上という面での効果はいま一つではないかと思われる。

報道によれば南寧市が導入したのは地元広西チワン族自治区の桂林客車工業集団製のバスで車重 15 トン、車長 12m、定員 66 名の大型バスである。バス代は従来の 39 番と同じ 1.5 元（20 円）とのこと。導入対象路線は市内の東西を結ぶ「39 番」路線で、選定の理由には起伏が少ない路線であることが考慮されたとあり、馬力の面で若干課題があるように思われた。導入台数は 8 台で当面 4 台が導入されたとのことだが、30 分ほど待ってみても充電するばかりで一向に営業運転に出る様子はなく、今回は乗車を断念した。



柳州市の投資環境

広西チワン族自治区は、2000 年から開始された「西部大開発」政策の対象 12 省の 1 つである。同政策は、中国西部の広大で未開発な土地と豊富な天然資源や水力資源に着目し、国が積極的なインフラ整備と優遇政策（企業所得税の半減等）を講じることにより重点的な産業育成を図ろうとするものである。

広西チワン族自治区は、西部地域 12 省の中では比較的発展した地域であるが、その中で最も工業に力を入れているのは「南寧市」の北にある「柳州市」である。今回、柳州市の外資誘致担当者から同市の投資環境について話を聞く機会があったところ、概要を以下に掲載したい。

- ・柳州市は面積 1.9 万平方^{キロ}、人口 370 万人（うち都市人口 150 万人）、市の地区生産総額は 1,032 億元と広西チワン族自治区第二の都市である。柳州市の特色は工業に力を入れていることで、2009 年の工業出荷額は 2,011 億元（+18.5%）とここ 3 年間で 2 倍となり、自治区全体の 4 分の 1 を占めている。
 - ・柳州市の工業の中心は機械産業であり、建設機械の「柳工」は有名である。その他にも「五菱」傘下の小型自動車組み立て工場があり、自動車部品産業も発達している。（日本からは金型企業が 1 社進出しているようである。）また、重化学工業では鋼材生産の「柳鉄」が 1 千万^{トン}規模の粗鋼生産能力を誇るほか、非鉄金属や「柳化」等の化学企業も存在する。
 - ・市内を流れる「百里柳江」に沿って 7 か所の工業団地が造成されており、高速道路や鉄道を通じて南シナ海沿いの「北海」港まで 400 ^{キロ}、柳州税関は 24 時間通関サービスを提供しているほか、豊富で安価な労働力（一般工で年収 9 千～1 万元）を誇っている。
- ※：ただし、実際に当地で投資を行っている台湾企業の総経理に聞いたところ、労働者は労賃こそ安いものの全体に若干のんびりしている気風があるようで、労働効率の面では「まあまあ（还可以）」との評価であった。また、人材の質で見た場合、高級管理人材が不足する傾向があることは否定できないようだ。

以上